

【書 評】

David Paul Haney *The Americanization of Social Science: Intellectuals and Public Responsibility in the Postwar United States* 2008 Temple University Press.

書評者 久 慈 利 武

著者ハーネイは1998年にテキサス大学オースチン校で博士学位(歴史学)を取得している。その博士学位を取得した論文を10年かけて推敲増補したのが本書である。論文の原題は「民主主義の理想, 科学の正当性, 公共的知識人 1945-1962」である。著者はオースチン・コミュニティカレッジ, セント・エドワード大学外部教授である¹。著者は1963年生まれで, 扱っている時代を経験していない。評者は1945年生まれで, 1964年に大学に入学, 1968年から1973年に大学院で社会学を専修し, 研究テーマは主に1950年代1960年代の合衆国ハーバード大学, コロンビア大学の社会学者である。なぜこのようなことに触れるかという, 時代の名残をかいた評者が読んでも, 本書はまるで同時代の著者が, しかも社会学者が書いたかのような感触を留めているのである。評者より10~15歳年長の同時代をフルに体験した者だったら一層その感慨を強くしたことであろう。

本書の存在を知ったのは, ターナー&ターナー『不可能な社会学: アメリカ社会学の制度分析』を読んで, 類書を探していた時である²。それまで本書の存在に気づかなかった。本書を入手してからもばらばら目を通しただけで, じっくり読むことはなかった。それがにわかに本書にじっくり目を通すことになったのは, デフレム「パブリック社会学批判 社会学をパブリック社会学から救う」を批判するニール・マックローリンが本書の書評をカナダ社会学雑誌に掲載したのに眼が触れたことであつた³。

本書は歴史学の専門誌, 社会学の専門誌に書評で取りあげられているが, マックローリン

¹ 著書の奥付。グーグル検索(2017: 5)でも地位, 身分に変化はない。外部教授 adjunct professor は日本での非常勤講師にあたる。

² 教養学部論集 167, 168号(2014)に「自然科学のようになれない社会学」という翻訳題で掲載。

³ ハーネイはパブリック関与への社会学の歴史と, プロフェッションから生まれたジレンマを社会学がいかに理解したかについて, 貴重な, 思索に満ちた貢献をしている。注意深く調べられたこの書は, 高等教育システムとより広い知的文化のなかで社会学が相対的に周辺化するのを克服した仕方を重視しながら, 1945-1963年のアメリカ社会学についてオーバービューを与えている。ハーネイのこの本は, 触発的で目を見張るというよりも, 堅実で信頼できるものである (McLaughlin 2010)。

のものを除くといずれも短く、あまり参考に値するものはない。本書の序論が著者の意図、考察のフレームを明快に語っているので、それを手がかりにしながら書評を行ってみたい。本書は博士論文をもとにしたものだけに、著者の問題意識もしっかりし、問題意識を解明するための章構成もがっちり組み立てられている。おそらく、出版戦略から読者を学者、研究者に絞らず、教養人層にもひろげること、焦点を当てた年代は1945-1962年だが、それ以前、それ以後にも目配りするように出版社から要請され、書題を一般向けの全く別なものに置き換え、ビュラフォイの社会学会長演説に端を発したパブリック社会学のブームにあやかろうと、それとのつながりを明らかにする文章を序論の末尾と終章の末尾に追加したことが想像できる。最終章は、社会学が科学的アイデンティティ（＝プロフェッショナル化、科学的正当性）追求した遺産と題して、1960年代以降、最近のサイドマンのポストモダニズム社会学、ジクムンド・バウマン、ローティのニュー・プラグマティズムまで取りあげている。論旨の骨格が多岐に亘ったり、論旨が曖昧になるのを防ぐために、本旨から外れる論点は、注に廻している⁴。ハーネイとしては、アカデミックな体裁を保ちつつ、読者層の拡大を図る出版社の要請に妥協をしているのだが、各章の表題も関心を引くように工夫している。ただ章を節に分けていないために、ひとつの章に複数のテーマ、研究対象者が盛り込まれているだけに、節に細分して節題を設けていたらと惜まれる。

書名『社会科学』のアメリカ化』は誤解を買いやすい⁵。本書の趣旨は、科学的社会学対知識人：アメリカ的学問の定義と防衛を巡る戦後期の攻防である。科学的社会学とは、社会（科）学を自然科学と並んで、科学として、新設の米国科学財団に仲間入りさせようと、米連邦議会に認知させようと努めたアカデミック社会学（者）、プロフェッショナル社会学（者）と、社会学のポピュラリティ、パブリック性（一般読者）を志向した社会学ベストセラー書の著者、言論誌の編集者、寄稿者であるパブリック社会学者、パブリック知識人の攻防が主題である。前者は主流を占めたハーバード、コロンビア大学のパーソンズ、スタウファー、マートン、ラザースフェルドであり、後者は社会学のベストセラー書で一般読者にも知られたリースマン、ミルズ、リプセット、ダニエル・ベル、ルイス・コーザー、ロバート・ニスベット、

⁴ Parsons 機能主義後の対抗パラダイムの割拠 (p. 7, p. 235), Alvin Gouldner の 70 年代社会学批判の位置づけ (p. 120), Herbert Blumer の社会学史上の位置づけ (p. 170), Elik Olin Wright のマルクス主義 (p. 240),

⁵ アメリカナイゼーションは、一般的語義はアメリカ以外の国がアメリカにならう（あやかる）ことだが、ハーネイはヨーロッパ社会学、フロイト、マルクス、デュルケム、ウェーバーの社会学がアメリカで自己流に消化されたことを指すためにその表現を用いている。フロイト精神分析→フロム、マルクス疎外→フロム、デュルケム・アノミー→マートンと弟子のアノミー論、仏語の「アノミー anomie」の米語の「アノミー anomy」への置換。大衆社会の章では、ヨーロッパの大衆社会論がアメリカ流に継承開花したことをとりあげている。これらは第4章と第5章。

ピティリム・ソローキン，社会学者ではないが言論知識人として知られるホフスタッター，
ホーリンガー，ライオネル・トリリング，アカデミズムに所属しないジャーナリストで社会
学を利用したり，社会学批判を展開したバンス・パッカード，ウィリアム・H. ホワイト⁶，
ベネット・バーガーである。

本書の章構成をみてみよう。

第1章 序論

1945年から1963年の社会学のアイデンティティ闘争

社会学「内部で築く者」と「内部から問題視する者」，「外部から問題視する者」の攻防

第2章 社会学の科学的正当性キャンペーン

自然科学並みの認知を求めて米国科学財団に社会科学も仲間入り申請，議会での審査会

SSRC（社会科学研究協議会）がパーソンズに申請書執筆依頼。結局は却下される。その
埋もれていた1948年文書の発掘（Klassner 1986）

ベイン，ランドバーク／パーソンズ／マートン

第3章 計量的方法と排他性⁷の制度化

スタウファー・グループ／ラザースフェルド

「アメリカの兵士」各種書評

コロンビア大学応用社会調査研究所の諸成果

第4章 ヨーロッパ「疎外」「アノミー」概念がアメリカ風土に移植されての変質

疎外，無関心，アノミー概念のアメリカナイゼーション，社会状態を指す概念から個人
人格状態を指す概念に

フロム／リップセット／モーリス・スタイン他

第5章 ヨーロッパ大衆社会論がアメリカ風土に移植されての変質

アメリカの左翼と右翼に関する社会学者の言論

アメリカの大衆社会論はファシズム，社会主義論

労働者に権威主義的態度の発見（アドルノ）

マッカーシズムの大学知識人への波紋（スタウファ，ラザースフェルド，ベル）

セルズニック／コーンハウザー／リップセット／スタウファー／ラザースフェルド／パー
ソンズ／ベル／アドルノグループ（ニュー・スクール・オブ・ソーシャル・リサーチ）

⁶ ストリート・コーナー社会の著者ウィリアム・フット・ホワイト（シカゴ大学→コーネル大学）で
はなく，オーガニゼーション・マンの著者でジャーナリスト。ミドルネームHはハーシュロン。

⁷ 計量的研究の排他性とは，計量的方法と技法を教える人物の関係で少数の大学の社会学科，研究所
が独占した状況を指す。

第6章 内気な社会学者にとって心穏やかでないパブリックの注目（ソローキン／ミルズ）

アカデミズム内部の者が身内を批判する心理とそれに対する逆襲

ミルズ「社会学的想像力」の先駆，ソローキンの Fads と Foibles

ミルズ「社会学的想像力」草稿（社会学の検死解剖）の内覧者のコメント，助言，忠告，苦言

「社会学的想像力」成書への各種書評（左翼，保守双方），主にパーソンズ誇大理論とラザー・スフェルド抽象的经验主義に絞ったことに対して

第7章 50年代のアメリカ社会学のパブリック・イメージ：疑似科学，社会工学，社会批評

ジャーナリストによる社会学酷評，批判

用語，方法論など誤解を恐れず率直に批評

ロバート・マートンによるジャーナリスト，パブリック・イメージからプロフェッショナルな社会学の擁護

ウィリアム H. ホワイト／ヨゼフ・ウッド・クラッチ／アンドリュー・ハッカー／ラッセル・カーク／マルコム・カウリー／マレイ・ケンプトン／ベネット・バーガー

第8章 公衆に人気を博することの孕む毒

バックカード／リースマン／ミルズ

偶然に公共知識人になった男：デヴィッド・リースマン

『孤独な群衆』が歴代社会学書で最大のベストセラーになった理由

公衆に人気を博することの孕む毒 ミルズの具体的社会学分析を事例に

『ホワイトカラー』『パワーエリート』

第9章 科学的アイデンティティ希求の遺産

科学的アイデンティティ概念を，プロフェッショナル・アイデンティティ，科学的正当性の獲得と同義に使用している

科学的理想を希求したことがその後のアメリカでの社会学にどんな影を落としているか

章題は非常に凝っている。プロフェッショナル社会学による科学的アイデンティティ，科学的レジチマシー（正当性）追求は，第2，3章，それに対抗した社会学者，パブリック知識人は第6，8章，ジャーナリズムからの社会学批判は第7章，ヨーロッパ社会学とは独立したアメリカ社会学の独自性，アメリカ化は第4，5章である。書題の「社会科学のアメリカ化」は第4，5章にふさわしいが，全体の表題としてはどうかと思う。副題の「知識人と公共的責任」は第6，8章，ライト・ミルズ，デヴィッド・リースマンにふさわしい。さらにマッカーシー旋風をめぐるアカデミアや知識人の言動を扱った第5章もふさわしい。

著者ハーネイの立ち位置はどこにあるか。ハーバード、コロンビア主流派の社会学には批判的で、公共的知識人の側に立っている。しかしミルズに対しては批判的である。リースマンに対しては好意的である。頁だけで見ると、ライト・ミルズの『社会学的想像力』を扱った6章は35頁で他の大部な章並みの待遇である。また8章でミルズの『ホワイトカラー』『パワー・エリート』にも章の半分を割いている。プロフェッショナル・アイデンティティを確保する主流にパーソンズ、ラザースフェルド、マートン、スタウファーの4人が挙げられている、プロフェッショナル・アイデンティティを批判する攻撃に應對し、擁護している人物としてマートンが頻繁に出てくる。主流の中心人物はマートンの観がある。ただしハーネイはマートンに批判的である。

ハーネイの議論の骨格を今一度確認しておきたい。

○日常生活に照射するアカデミック社会学がアメリカでは社会科学の中でパブリックから比較的低い注目しか集めてこなかった特殊事情を探る

それは、アカデミック社会学がプロフェッショナル・アイデンティティ、科学的正当性の追求に必死になってきたことに理由がある

このプロフェッションに影響力を持った人物達は広い公共圏と社会学の関係、アカデミックな学者が公的なイシューに公開でアドレスする責任の縮小に大いに寄与した

また機会とコミットメントの急速な拡張が、明確な自画像を欠いていた若い学問である社会学を影響力と責任の増した地位に押し上げた

○戦争終了後のアメリカ社会学の世代交代⁸がこのプロフェッションのアイデンティティを固めるのを助けた コロンビア大学とハーバード大学社会学科が先導した

なぜ、パーソンズ、スタウファー、ラザースフェルド、マートン等若い世代が戦前に有力であった世代からアメリカ社会学会の主導権を奪えたか

それぞれの大学で社会学科の改編、運営のリーダーシップを奪取し得たのか

*大恐慌から第二次大戦にかけて空白期 ニューリーダーが若くして台頭するチャンスが生まれた

1930年と1945年で社会学会会員半減、社会学博士号取得者停滞（ニュー・デール政策への動員、戦時中の戦時情報局調査への動員）、増えない社会学アカデミックポストへの就職難

⁸ ハーネイ著はさほど詳しく触れていない。ターナー、ターナー（1990）が詳しい。

たまたま戦前のリーダー（第一次世界大戦以前の博士号取得者）の戦争終結までの間に退職を迎えるか、退職間近であったエアポケットが生じたこと

* 復員兵援護法で大学入学者，社会学専攻，履修者の急増，

ハーバード，コロンビア大学 1940 年代に世代交代，大学院養成大学への改組（ハーバード社会学関係学科 1946），コロンビアへのラザースフェルド，マーティンの就任（1941）

* 研究費獲得の幸運と激変

民間財団研究資金（ロックフェラー財団のグラント）と個人的パイプ

パーソンズ（ヘンダーソン，エルトン・メーヨー），

ラザースフェルド，スタウファー（戦時軍研究費）

連邦政府による研究資金の劇的急増

○戦後社会学の歴史編纂のもう一つの中心テーマは社会学の方法論の発展，サーベイ・リサーチの発展である。社会科学のサーベイリサーチと特に世論調査の歴史研究は，サンプリング法，尺度分析，有意差検定，パタン変数，その他の計量的リサーチを追跡する⁹。だが，本研究は，戦後社会学の理論的，方法論的概略の分析はやり過ぎし，それらに伴随した職業的（プロフェッショナル）イデオロギーの社会的，歴史の意味を検討するとハーネイは焦点を限定。社会学者にとっては残念であるが，叙述が拡散しない効果を上げている。

○社会学が推し進めてきた科学的アイデンティティは，公共言説，民衆から隔離されて起こる場合に一層栄えた。本書は公共言説とパブリックへの関与から離れたことが，社会学の科学的エートスに及ぼした影響を追求する

○その一つの帰結 社会学自体の内部に告発者，中傷する者が現れた（第6章）

社会学が科学になろうとする野心の攻撃 プロフェッショナル・アイデンティティに対する非難

また主流社会学者から無視されたテーマ 人種問題，都市と農村の貧困，核競争，商業主義に彼等は積極的に取り組んだ

社会学内の論争に伴い，社会学者でないジャーナリストも新聞，雑誌，言論誌で公然と社会学批判が起こるようになった（第7章）。自明のもの，常識的解釈で済ませられるものにわざわざもったいぶっているという指摘 プロフェッショナル・アイデンティティ構築に力

⁹ John Madge 1962 *The Origin of Scientific Sociology*.

Jean Converse 1987 *Survey Research in the United States: Roots and Emergence, 1890-1960*.

を貸しているのが専門用語 それが他方で、公共圏と社会学（学問）の交流にとって障害になっている

○科学的アイデンティティは戦後社会学の傑出した理論潮流、イデオロギー潮流の形成を助けた

* 理論潮流では機能主義、独立した主体の利害と知覚に基づくよりも支配的規範と価値に従って交流する システムとしての社会を重視 人間の能動性を軽視

* イデオロギー潮流では

参加民主主義の理想よりも民主主義の実際

パブリックの無関心、労働者階級の権威主義、

アメリカの政治を、エリート間の競争、市民活動よりも、テクノクラート知識人による最適に情報精通した意思決定からみる

疎外、アパシー、アノミー研究（第4, 5章）

○指導的社会学者（タルコット・パーソンズとポール・ラザースフェルド）は社会学のアイデンティティを築くのに、財団の研究資金を獲得することと並んで、外部の制度的圧力から自分たちの学術調査を隔離することに熱心であった

財団は実用的結果、政策志向、問題焦点的であったが、彼等（指導的社会学者）は社会や社会行動についての、累積的知識群、基礎研究への献身を学問の科学的進展と考えた

しかし、戦後社会学が具体的問題解決、広い公共圏からなぜ遠ざかったかは、財団によるヘゲモニー言説からは説明し得ないとハーネイは考える。

客観的知識の希求は、急激な社会変動、社会について推論し、有意な結論を得る個人の能力を信じられなくなったことで起こった。その短い歴史、独自の主題の不在、息の長い理論、方法論の伝統の不在が、政治的文化的不確実の時代に、科学の新しい権威に訴えることによって、プロフェッションの地位を確保するように導いた、と彼は考える。

これは、ロバート・バナスター¹⁰が戦前の社会学に当てはめたスキームだが、同じスキームをハーネイは、戦後の社会学にも当てはまるものと考えた（p. 16, p. 186）。

1920年代、新世代のアメリカ社会学者は自然科学の方法論を採用することによって、社会学をもっと客観的なものになろうと試みた。ロバート・バナスターはレスター・

¹⁰ Robert Bannister 1987 *Sociology and Scienticism: the American quest for objectivity, 1880-1940*

ウォード、スモール、サムナー、ギデングスら創始者の進化主義のマトリックスの内部に「客観主義」が出現したことに関する最初の包括的な考察を与えている。「客観主義」は研究を社会行動の観察可能な外部に限定し、結果を計量化することを意味した。「客観主義」は戦前の思弁的、改良的社会学からのはっきりとした離反であったため、しばしば過激な世代間闘争を引き起こしたものの、社会学の客観主義は戦前の社会学に深い根を生やしていた。「客観主義」は最初社会学の第二世代（その最も卓越したメンバー達は第一次世界大戦以前に博士学位を取得した）の作品に浮上した。それは次第に「リアリスト（実在主義者）」変種と「ノミナリスト（名目主義者）変種」と呼称されるものに形を取り始めた。前者はルーサー・リー・バーナード、後者はウィリアム・オグバーン、E. スチュアート・チェイピンに代表される。バーナードにとって、科学的な社会学はラディカルで、社会政策のために絶対的基準を定めた。オグバーンとチェイピンにとって、科学的な社会学はエキスパートが目的よりもむしろ手段に専ら関わろうとする意味での提言的で統計学的なものであった。客観主義者は内部で割れていたものの、両者は力を合わせて、シカゴ学派の独占に挑戦した1930年代アメリカ社会学会内部のバトルに身を投じた。彼等は1950年代を通じて社会学を席卷したパーソニアン理論家と新世代計量家（スタウファー、ラザースフェルド）のインフォーマルな同盟に道を開いた。

ウォードならびに他の創始者の経歴に新しい光を当てることによって、指導的な客観主義者の経歴にオリジナルな考察を与えることによって、バニスターは第一次世界大戦前と後の社会学の歩みにユニークな見方を提示している。彼は理論形成を制度的、イデオロギー的、伝記的場面に置き、近代のアカデミックなプロフェッション（社会学のこと）の形成に比類のない見方を提示している¹¹。

ハーネイのこの書は、はったりを利かせて人目を引こうとする戦術をとらず、また論点が多岐に分散しないように配慮し、逸脱的論点は注に回している。リースマンの『孤独な群衆』がどうしてベストセラー書になったか、内部指向型人間と自立の区別がをあいまいなこと、他人指向型の次の時期の人間類型が提示されない終わり方が批判を受けたことなど興味深い論点の追求は回避している。またC. ライト・ミルズの『社会学的想像力』がなぜ今日でも人気があるのか、当初人気を博した当時とは別な受け止め方がされていること、ハンス・ガース、エドワード・シルズ、ポール・ラザースフェルド、ロバート・マートンから嫌われたミルズの人間性にもかかわらず、社会学者、院生になぜ根強い人気があるのか。『ホワイト・

¹¹ Robert Bannister 1987 Book データベースより

カラー』『パワー・エリート』はもはや振り向かれないのに、なぜ『社会学的想像力』だけが読まれ続けるのか。本書は残念ながらそのような疑問には応えてくれない。マイケル・ビュラフォイによって再燃された「パブリック社会学」だが、ビュラフォイ以前にアメリカ社会学学会会長演説で唱えたハンス・ガース（1989）、アルフレッド・マクラング・リー（1976）が、序文でしか触れられていない。「パブリック社会学」に興味ある読者には、源流が1950年代にいたこと、当時の主流社会学の有力な対抗潮流であったことを教えてくれよう。